

キャンプ体験が幼児・児童の好奇心に与える影響 ～保護者からみた子どもの変容～

右田 奈緒子 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)
指導教員 中野 友博

キーワード：幼少期、キャンプ体験、好奇心、性格特性

1. 序論

幼少期における教育は人格形成を培うために大切なものとされている。幼少期の生活や様々な体験が生きる力の基礎を育成するとされている。幼児は多くの場合、好奇心に動機づけられ、積極的に探索活動を行い、様々なことを学習していく。蓬田は、幼い頃から自ら学ぶ意欲を育むことが重要であるとし、自ら学ぶ意欲を内発的な動機づけとして捉えている。

そこで本研究では、内発的動機づけ傾向の中の好奇心に着目して、多くの教育的効果が期待できる組織キャンプで幼児の好奇心に与える影響及び好奇心の変化を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【被験者】2011年8月12日、24～26日に実施された「びわこ・ちびっこキャンプ」の参加者(年長～小学2年生)の保護者のうち質問紙が回収できた29名を対象とした。

【調査方法】

1) 子どもの好奇心の変化

陳が幼児用の行動様式質問紙(BSQ)をもとに作成した内発的動機づけ傾向質問紙を使用し、全体、性別、学年別に調査した。質問6から10は逆転項目である。

2) 子どもの好奇心と性格特性の関係

分析心理学の創始者であるユングの外向・内向説を用い、質問項目を作成した。

調査は6件法で行ない、キャンプ前(Pre) キャンプ直後(Post1)、キャンプ1ヵ月後(Post2)の計3回実施した。

3. 結果と考察

キャンプ前後における好奇心の変化に差があるかをみた結果、学年別における年長の得点に有意な向上がみられた。

($F(2, 26)=4.10, Mse=3.74, p<.05$)

分析結果を表1に示した。

表1 Pre、Post1、Post2の好奇心得点(学年別得点)の平均(M)と標準偏差

	Pre		Post1		Post2	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
年長(n=6)	3.77	0.55	4.11	0.52	4.25	0.54 *
1学年(n=10)	4.49	0.73	4.69	0.67	4.23	0.86
2学年(n=13)	3.70	0.63	3.84	0.57	3.86	0.50

*: $p<.05$

項目別では、質問4「なじみのある場所よ

り新しいところへ行くことを好む」、質問8「何か物事をするとき動作がのろい」、質問10「新しい場面においては引込み思案になる」において有意に向上した。その要因として、年長は、キャンプに参加したことで興味や関心が高まり、また、他人に合わせ行動するというものを経験したことでキャンプ後の行動に変化が出たと考えられる。

男子は、質問6「新しいことに取り組む気にさせるには励ましてやる必要がある」において有意に向上した。男子は、興味を持ったものに没頭し、夢中になって取り組む傾向があるとされ、キャンプの中でも夢中になれる体験ができたことにより、キャンプ後、励まさなくても自ら興味をもち新しいことに取り組めるようになったと考えられる。

外向的・内向的別に好奇心の得点に変化があるのかをみたところ、有意な結果はみられなかった。その要因として、親の前での性格とキャンプ中の性格とでは異なっていたという可能性が考えられる。今回保護者にのみアンケート調査を行ったため、キャンプ中での性格も調査し、信頼性をはかる必要があると考えられる。また、短期間のキャンプであったため、性格の変化に影響を与えるのは難しかったと考えられる。長期間のキャンプ行いまた、1年後2年後と継続して体験する中で、その体験が身に付き、性格は変化していくのではないかと考えられる。

4. まとめ

全体でみた場合、キャンプ前後の好奇心得点に変化はみられなかった。しかし、学年別、男女別にみたところ、男子と年長に有意な差が見られた。年長には、キャンプでの野外炊事や新しい友達との関わりといった新奇な体験が変化を与えるものであったと考えられる。今後、データの有意な差をみるためにも、キャンプ中に、カウンセラーによる観察法を行う必要があると考える。

5. 参考文献

- 1) 蓮田、飯田、井村(2000)長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響 日本野外教育研究 p13-222
- 2) 陳恵貞(1996)幼児の「内発的動機傾向」尺度の作成と検討 名古屋大学院教育学研究科博士課程(後期) p231-241